

介護老人保健施設での老年看護実習における学生の学び

千葉真弓¹⁾, 原田美香¹⁾, 細田江美¹⁾,
楠本祐子¹⁾, 渡辺みどり¹⁾

【要 旨】 本研究は介護老人保健施設で高齢者を対象に看護過程を展開する老年看護実習での学生の学びを明らかにし、介護保険施設という生活の場における実習の意義や今後のあり方への検討資料を得ることを目的とした。平成18年10月から平成19年7月までに老年看護実習を行い、研究に同意の得られた学生41名の実習における学びに関する記録を質的に分析した。

結果、老年看護実習での学びとして193コードから【高齢者の特徴の理解】、【高齢者看護の実践】、【高齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】、【施設ケアの特徴の理解】、【高齢者ケア施設における看護の役割理解】の6つのカテゴリーが抽出された。学生は看護の対象である高齢者との関わりをとおして【高齢者の特徴の理解】を深めるとともに、自身の【高齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】をすすめて、より個性の高い【高齢者看護の実践】を行っていた。これら学生の学びの進展とその内容から、生活の場を重視した看護実習の重要性が確認された。

【キーワード】 老年看護実習 介護老人保健施設 学生の学び

I. はじめに

わが国における人口の高齢化は著しく、厚生労働省の報告では2005年に65歳以上の高齢者が全人口に占める割合が20%を超えたとしている。また2015年には65歳以上人口が3,277万人、高齢化率は22.5%となる見通しといわれている（厚生労働省、2006）。このような人口の高齢化を背景に、寝たきり状態にあり介護を要する高齢者や認知症高齢者への介護問題が大きな課題となってきた。

高齢者の健康問題のひとつである認知症は、加齢とともに発症が増加する傾向にあり、今後も認知症高齢者の人口は増えていくことが予想され、そのケアについても高齢者介護の現場では大きな課題となっている。また医療現場では、認知症高齢者への適切な対応のと

れる人材が少ないことにより、検査や処置の実施困難、認知症高齢者の行動障害の悪化など、様々な問題が生じている。今後ますます増える認知症高齢者に対し、医療の場で適切な治療やケアを提供することは必須であり、看護教育においても認知症高齢者を理解し、適切に対応できる人材育成が求められる。このような観点から、老年看護領域においては、高齢者に特徴的な疾患や認知症に関する十分な知識と看護技術、特に障害を有しながら生活するという視点で看護を考えられる能力や実践能力が看護師に求められると言えよう。

本学の老年看護実習では、平成10年より介護老人保健施設で3週間、認知症あるいは寝たきりにある高齢者を受け持ち、看護過程を展開するという学習内容を提供している。この実習では、治療中心に看護が展開される医療現場とは異なり、疾患や障害を有しながら

¹⁾ 長野県看護大学
2007年10月10日受付

ら生活することに主眼をおいた看護を展開する。疾患や障害を持ちながら生活する高齢者と関わることで、高齢者の特殊性を踏まえ、個々の健康レベルに応じた基本的な看護方法を取得し、他職種とのチームアプローチのなかでの看護の位置づけや役割、専門性を考察することを実習の目的としている。

この実習で学生がどのような学びをしているのかを明らかにすることで、実習における学生への教育成果を明らかにすることができ、医療施設とは異なる生活の場である介護保険施設で実習する意義が確認でき、今後の教育方法に有用な示唆が得られると考えた。

II. 目 的

介護老人保健施設において、身体的障害あるいは認知症により日常生活に支援を要する高齢者を対象に、看護過程を展開する老年看護実習の学生の学びを明らかにする。これにより、今後の老年看護領域の実習内容および方法の検討のための資料とする。

III. 研究課題

- 1) 老年看護実習での学生の学びの内容にはどのようなものがあるか。
- 2) 学生の学びは、老年看護学実習における学習目標を達成するものか。
- 3) 学生の学びから本学老年看護実習の意義やあり方を検討する。

IV. 方 法

1. 対 象

平成18年10月から平成19年7月に老年看護領域で実習を行った学生80名のうち、調査協力に同意の得られた学生の老年看護実習記録を分析対象とする。

2. データ収集方法と分析方法

研究協力に同意の得られた学生の老年看護実習での実習記録を分析対象とし、老年看護実習における学生の学びについての記述内容を分析する。

分析対象とした「実習での学び」の実習記録は、3

週間の老年看護実習の中で学びとして得たことや気づいたこと、あるいは今後の実習へむけて明らかとなった自分自身の課題等について、学生が自由に記述する記録である。

老年看護実習最終日に提出される「実習での学び」の実習記録を精読し、実習での学びに関する記述内容を学びの内容一単位ごとに取り出し、内容とその性質の類似性に着目し、分類し、サブカテゴリー・カテゴリー化を行った。また、得られた結果の信憑性の確保のために、老年看護の研究者によるグループ討議によって、それぞれのカテゴリーの内容の妥当性を検討した。

V. 倫理的配慮

老年看護実習が終了した学生個々に対して、研究の主旨・方法を文書で説明し、文書で同意の得られた学生の実習記録を分析対象とした。学生に対しては、研究への協力の有無は自由であり、研究協力の有無により不利益をこうむらないこと、分析の際には個人が特定されないようにプライバシーに配慮すること、分析は実習終了後かつ評価終了後に行い、実習成績に影響がないことを説明した。また実習施設名も記号化した。

VI. 老年看護実習内容

1. 実習の目的

この実習の目的は、高齢者の特殊性をふまえ、健康レベルに応じた基本的な看護ケアの方法を取得し、他職種とのチームアプローチのなかでの看護の位置づけ、役割、専門性を考察することとしている。具体的な学習課題として、以下の4点をあげている。

- 1) 認知症、寝たきり状態にある高齢者のQOLをふまえた看護過程の理解
- 2) 高齢者との関わり方の理解
- 3) 高齢者の生活の場である施設と利用者の特徴の理解
- 4) 高齢者介護施設での看護職の役割の理解

2. 実習の実際

実習施設は、N県内の介護老人保健施設であり、実

習期間は3週間で施設実習日は実質11日間である。介護老人保健施設とは、介護保険法で定められた高齢者の介護施設で、入院治療は必要ではないが、機能訓練や看護、介護が必要な要介護者のための施設である。いわゆる医療機関と在宅との中間施設といわれており、在宅復帰あるいは介護老人福祉施設（特養）への入所までの間、要介護高齢者が生活をする施設である。学生は、このような施設で高齢者を1名受け持ち看護過程を展開する。対象となる高齢者は、主に寝たきり状態にある高齢者あるいは認知症高齢者である。

学生は11日間の施設実習のなかで受け持ち高齢者を対象に日常生活支援を中心とした看護過程を展開する。具体的には、日々の日常生活援助や施設が提供している集団プログラム、個別プログラムへの参加を支援する。受け持ち高齢者への関わりが中心となるが、施設での日常生活の中で他的高齢者と一緒に活動することや、他的高齢者に対して施設スタッフと共に介助に入る機会がある。このような実習期間中の学生の活動が安全かつ円滑にすすむよう、教員は施設のスタッフから協力を得ながらサポートしている。

更に、受け持った高齢者への看護過程の展開のために、実習第2週目に中間カンファレンスを設け、学生の受け持ち高齢者へのアセスメント内容についてディスカッションする機会を設けている。この場には実習指導者として、直接指導を受け持つ教員の他に本講座の教員ならびに施設の実習担当者が参加し、学生の受け持ち高齢者へのアセスメントについて学生と意見交換を行う。また実習第3週目には、中間カンファレンスと同様の構成メンバーによる最終カンファレンスを設け、実習期間に行った看護過程の展開を報告し、実習での学びを発表する場を設け、施設実習での学習を統括する機会を提供している。

Ⅶ. 結 果

1. 学生の学びの内容

最終的に同意の得られた学生は41名であった。学生の学びに関する記述から193コード、83下位カテゴリーが得られ、最終的に【高齢者の特徴の理解】、【高齢者看護の実践】、【高齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】、【施設ケアの特徴の理解】、【高齢者ケ

ア施設における看護の役割理解】の6カテゴリーが抽出された（表1、表2）。以下にカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを[], 下位カテゴリーを『 』, として、カテゴリー毎にその内容を説明する。また、「 」は学生の記録の記述内容で（ ）内の番号は学生のID番号をあらわす。

2. 【高齢者の特徴の理解】

【高齢者の特徴の理解】は、学生が高齢者とのかかわりをとおして深めていった高齢者の特徴についての認識である。[高齢者の身体的側面の理解], [高齢者の思いの推察], [高齢者の生活の理解], [高齢者の能力の発見], [ケアの高齢者への影響の気づき], [認知症高齢者の特徴の理解]の6つのサブカテゴリーにより構成された。

[高齢者の身体的側面の理解]は『身体・精神面の変化の日常生活への影響を把握する』、『疾患が高齢者の身体面・精神面に影響することを知る』、『予備力のなさを実感する』という下位カテゴリーで構成された。

『身体・精神面の変化の日常生活への影響を把握する』での学生の記述は「高齢者の体調が崩れたり、悪化したときに原因を探るだけでなく、それが食事・排泄・清潔などの日常生活にどのような影響が生じているのかを把握することが大切 (No.14)」というものであった。『疾患が高齢者の身体面・精神面に影響することを知る』では、「疾患によって高齢者は身体状況だけでなく精神状況まで大きく影響を受けるということを学んだ (No.31)」という記述がみられ、『予備力のなさを実感する』は「下痢と嘔吐により、部屋で何日も臥床したままの状態になってしまった (No.11)」という学生の記述にあるように、身体機能低下による予備力のなさによって体調の変化が身体面や精神面に与える影響の大きさを実感するというものであった。

また、[高齢者の思いの推察]は、言動からその背景にある高齢者の思いを推察する『言動から思いを推察する』といった下位カテゴリーがあり、学生の記述は「一つ一つの動作にこめられた高齢者の思いを理解することが大切 (No.17)」というものであった。

[高齢者の生活の理解]では、高齢者の身体的側面のみでなくその人の生活に着目した『全体像と生活から理解する』、『日常生活の意味の重さを実感する』と

表 1. 高齢者理解と看護に関する学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	下位カテゴリー
高齢者の特徴 の理解	高齢者の身体的側面の理解	身体・精神面の変化の日常生活への影響を把握する 疾患が高齢者の身体面・精神面に影響することを知る 予備力のなさを実感する
	高齢者の思いの推察	言動から思いを推察する
	高齢者の生活の理解	全体像と生活から理解する 日常生活の意味の重さを実感する
	高齢者の能力の発見	高齢者の保持している能力に気づく 高齢者の意欲と心の豊かさを知る
	ケアの高齢者への影響の気づき	ケアの質により高齢者の能力発揮が変化することを実感する 肯定的な見方は高齢者のありのままの姿の理解を促す 自分らしい生活から感じる喜びが活力につながる
	認知症高齢者の特徴の理解	認知できないという状態を知る 認知症の症状の個性性に気づく 認知症高齢者の自分を失う辛い気持ちを知る 能力を失う辛さの反応として問題行動があると理解する ケアがその人の認知力や能力発揮に影響することを知る 認知症高齢者の保持している能力に気づく そのとき楽しいと感じたり「快」を感じて生活することが大切だと理解する 小さな情報の統合によりその人がわかるようになる
高齢者看護の 実践	生活中心の看護実践	体調の管理の重要性を認識する 生活を重視した健康管理をする 多様な健康レベルに合わせた支援を大切にする 医学的な視点を重要視する 穏やかな日常生活を支える 日常生活援助技術を習得し介助する
	対象理解の深まりと看護実践	その人の思いを知る その人の気持ちに寄り添う 人生背景や価値観を重視する その人のありのままの生活を支える その人らしい生活が出来るよう支援する 高齢者の思いを聴く
	高齢者への個別的な看護実践	高齢者の気持ちの表出を促す 高齢者の力を引き出す支援を考える 限らない高齢者の力を見つける 高齢者の意欲を引き出す 高齢者の肯定的な気持ちを引き出す 認知症高齢者への言動に多様な対応を試みる 今の見方にとらわれない柔軟な見方をする 高齢者に思いが伝わるようなコミュニケーションを工夫する 認知症により本来の姿を失うからこそ個性性の保護が重要と認識する 触れ合うことで安らぎや安心感を提供する 高齢者がイメージしやすい声かけを工夫する 高齢者の楽しみや課題を見つけ、提供する 高齢者を見守る／そこに高齢者と共にいる 高齢者への役割提供や肯定的フィードバックを行う
高齢者観の 発展	高齢者観の再認識	人生の先輩である／常に尊敬する人々である 疾患や障害への不安を抱えている
	高齢者観の発展	意欲を持った人々である／人生の重みを伝える存在である 日常生活の意味に重みのある存在である
援助者としての 学生の成長	援助者としての自己への気づき	全体像がとらえにくく援助課題の明確化に悩む 援助者の心理は相手に伝わることに気づく 自分と相手の気持ちは分離・整理が必要と気づく 自分を振り返ることが大切と気づく
	多角的な対象理解	一方的な見方は相手の本質を隠し、援助関係も左右されることを知る 人にはいろいろな面があると改めて気づく
	援助の基本姿勢の再確認	相手が必要とする部分を援助することに気づく 相手不在の援助の無効に気づく
	関わりの援助的意味の理解	関わりの大切さを実感する あきらめずに誠実に関わる姿勢が大切と感じる 共に居ることの援助的意味を知る
	関わりの楽しさ、難しさの実感	さまざまな角度から援助を考えることは楽しいと感じる 対象理解は簡単なことではないと実感する
	自己の課題の明確化	自分を意識して振り返る／思いを言葉で表現していく

いった下位カテゴリーで構成された。学生の記述内容は、それぞれ「身体面だけでなくその人が今までしてきた生活歴も理解することでその人の理解が深まる (No.7)」、「まだこれからの人生が長い私たちとは違う、一日一日の生活が過去、現在、未来につながり、意味の重さを思い知らされた (No.37)」というものであった。

『高齢者の能力の発見』は『高齢者の意欲と心の豊かさを知る』、『高齢者の保持している能力に気づく』という下位カテゴリーから構成された。

『高齢者の意欲と心の豊かさを知る』は、高齢者は自分のことは少しでも自分でしたいという思いを持っている、日常生活の些細な自立に満足を見だし喜びを表現できる、援助場面で学生に感謝の気持ちを表現できるといった高齢者の心理面への学生の気づきである。『高齢者の保持している能力に気づく』は、高齢者は能力を十分に保持していることに気づくといった内容で、学生の記述には「自分の意思をはっきりと伝えられ、自尊心も保たれているとわかった (No.31)」という内容がみられた。

『ケアの高齢者への影響の気づき』では、『ケアの質により高齢者の能力発揮が変化することを実感する』、高齢者の言動を肯定的に捉えることで、ありのままの姿として高齢者の言動を受け止め理解できるようになるといった『肯定的な見方は高齢者のありのままの姿の理解を促す』、『自分らしい生活から感じる喜びが活力につながる』という下位カテゴリーが含まれた。

『ケアの質により高齢者の能力発揮が変化することを実感する』には「高齢者はたくさんの能力や強みを持っていてただ援助を受けるだけの存在ではなかった。そのなかで発揮できる力はたくさんあるが、その力をどれだけ出せるかはケアの質によって変化するのだと感じた (No.28)」という記述がみられた。また『肯定的な見方は高齢者のありのままの姿の理解を促す』での学生の記述は「肯定的な見方で相手の強みを見いだすことで、高齢者のありのままの姿を感じることができた (No.37)」というものであった。

『認知症高齢者の特徴の理解』には『認知できないという状態を知る』、『認知症の症状の個別性に気づく』、『認知症高齢者の自分を失う辛い気持ちを知る』、

『能力を失う辛さの反応として問題行動があると理解する』、『ケアがその人の認知力や能力発揮に影響することを知る』、『認知症高齢者の保持している能力に気づく』、『そのとき楽しいと感じたり「快」を感じて生活することが大切だと理解する』、『小さな情報の統合によりその人がわかるようになる』の8つの下位カテゴリーが含まれた。

『認知できないという状態を知る』には「こちらの話しの内容が理解できず、求めた答えが返ってこない (No.7)」、「話しかけてもなかなか理解して動いてくれない (No.9)」といった記述がみられた。『認知症の症状の個別性に気づく』には「認知症の症状は複雑で、その現れ方も一人ひとり異なると実感した (No.38)」という記述がみられた。『能力を失う辛い気持ちを知る』には、認知症高齢者であっても自分の認知力の低下を自覚し、辛い気持ちを抱えていることを知るというもので、「認知症によって本人も本来あるべき自分の姿でないことに辛さを感じていた (No.11)」という記述がみられた。『能力を失う辛さの反応として問題行動があると理解する』には「認知症高齢者は記憶や能力が失われていく不安がつきまとい、自分の考えや気持ちが思うように表出できない辛さがさまざまな暴言や他から見たら問題と思われる行動につながってしまったのだと実感した (No.40)」という記述がみられた。『ケアがその人の認知力や能力発揮に影響することを知る』には「その人の生活リズムや性格等を考慮した声かけが、ケアの受け入れや高齢者の認知に影響することがわかった (No.31)」という記述がみられた。

3. 【高齢者看護の実践】

【高齢者看護の実践】は、受け持ち高齢者あるいは施設の高齢者に対して実習のなかで展開していた看護実践に関する学生の学びである。[生活中心の看護実践]、[対象理解の深まりと看護実践]、[高齢者への個別的な看護実践]、の3つのサブカテゴリーにより構成された。

【生活中心の看護実践】は治療や疾患管理といった医療を重視した看護実践だけではなく、生活を中心に健康管理をすることの重要性に気づき実践するという学びの内容である。このサブカテゴリーには、『体調の

管理の重要性を認識する』、『生活を重視した健康管理をする』、『多様な健康レベルに合わせた支援を大切にする』、『医学的な視点を重要視する』、『穏やかな日常生活を支える』、『日常生活援助技術を習得し介助する』という6つの下位カテゴリーが含まれた。

〔対象理解の深まりと看護実践〕のサブカテゴリーには、『その人の思いを知る』、『その人の気持ちに寄り添う』、『人生背景や価値観を重視する』、『その人のありのままの生活を支える』、『その人らしい生活ができるよう支援する』、『高齢者の思いを聴く』という下位カテゴリーが含まれた。『その人のありのままの生活を支える』には「施設の生活の流れにあわせるのではなくその人のありのままの姿を崩さないよう生活することを支える (No.7)」という記述がみられた。『その人らしい生活ができるよう支援する』には「その人がその人らしく一日を穏やかに過ごすためにその人に深く根ざしたものを生活に取り入れること (No.19)」という記述がみられた。

〔高齢者への個別的な看護実践〕には、『高齢者の気持ちの表出を促す』、『高齢者の力を引き出す支援を考える』、『限らない高齢者の力を見つける』、『高齢者の意欲を引き出す』、『高齢者の肯定的な気持ちを引き出す』、『認知症高齢者への言動に多様な対応を試みる』、『今の見方にとらわれない柔軟な見方をする』、『高齢者に思いが伝わるようなコミュニケーションを工夫する』、『認知症により本来の姿を失うからこそ個別性の保護が重要と認識する』、『触れ合うことでやすらぎや安心感を提供する』、『高齢者がイメージしやすい声かけを工夫する』、『高齢者の楽しみや課題を見つけ、提供する』、『高齢者を見守る』、『そこに高齢者と共にいる』、『高齢者への役割提供や肯定的フィードバックを行う』の15の下位カテゴリーが含まれた。『認知症により本来の姿を失うからこそ個別性の保護が重要と認識する』では「認知症となり人格が変化していく中で高齢者は辛さを感じていた。だからこそ最期までその人らしく生活を送れるように支援することの大切さを学んだ (No.11)」という記述がみられた。

4. 【高齢者観の発展】

【高齢者観の発展】は、学生の高齢者に対する見方、

イメージに関する学びの記述内容で、〔高齢者観の再認識〕と〔高齢者観の発展〕の2つのサブカテゴリーから構成され、〔高齢者観の再認識〕には『人生の先輩である』、『常に尊敬する人々である』、『疾患や障害への不安を抱えている』という3下位カテゴリーが含まれ、〔高齢者観の発展〕には『意欲をもった人々である』、『人生の重みを伝える存在である』、『日常生活の意味に重みのある存在である』という3つの下位カテゴリーが含まれた。

5. 【援助者としての学生の成長】

【援助者としての学生の成長】は、看護過程を展開するなかでの学生の援助者としての成長に関する学びの内容である。〔援助者としての自己への気づき〕〔多角的な対象理解〕〔援助の基本姿勢の再認識〕〔関わりへの援助的意味の理解〕〔関わりへの楽しさ、難しさの実感〕、〔自己の課題の明確化〕の6サブカテゴリーで構成された。

〔援助者としての自己への気づき〕は援助者としての自分自身への気づきという学びの内容で、『全体像がとらえにくく援助課題の明確化に悩む』、『援助者の心理は相手に伝わることに気づく』、『自分と相手の気持ちは分離・整理が必要と気づく』、『自分を振り返ることが大切と気づく』という4下位カテゴリーが含まれていた。『援助者の心理は相手に伝わることに気づく』では、「援助者の気持ちは思った以上に高齢者に影響することを知りました。こちらの焦りが相手に伝わり困らせてしまった (No.36)」という記述がみられた。

〔多角的な対象理解〕には、人はさまざまな側面を持ち、見方を広げて対象をとらえることの重要性に気づくといった『一方的な見方は相手の本質を隠し、援助関係も左右されることを知る』、『人にはいろいろな面があると改めて気づく』という2つの下位カテゴリーが含まれた。

〔援助の基本姿勢の再確認〕は自分の援助姿勢の振り返りから、援助の基本的姿勢を再確認するというもので、2つの下位カテゴリーが含まれた。ひとつは『相手が必要とする部分を援助することに気づく』というもので、他に対象者への意思の確認なく援助者の一方的な思いから行う援助は援助たり得ないことに気づくと

表2. 施設ケアの特徴と看護の役割に関する学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー	下位カテゴリー
施設ケアの特徴の理解	ケア提供の場の特徴	施設は高齢者にとって生活の場であり、家であり社会であると知る 高齢者の個性が集団からの逸脱を招くことに気づく 高齢者どうしは互いに生活に影響しあうことを知る ケアの質がそこでの生活の質に影響すると感じる 家族へのケアの重要性に気づく
	施設での連携の特徴	他職種との連携が密に図られる場であることを知る 他職種それぞれの立場、見方を尊重することで連携が図られていることを知る ケア提供者間の体験の共有が連携に役立つと気づく
高齢者ケア施設における看護の役割の理解	高齢者の健康管理	疾患を持った高齢者の健康管理をする 高齢者の生活を重視した疾患管理をする 高齢者の体調変化の原因を探る 日々の言動から認知症高齢者の健康状態を把握する 言動の変化から認知症高齢者の健康状態の変化をとらえる
	健康管理に関する他職種との連携	それぞれの職種の見方を尊重する 他職種からの情報を統合する 根拠を持って看護判断を下す 判断の結果を他職種に伝える

いった『相手不在の援助の無効に気づく』という下位カテゴリーが含まれた。

【関わりの援助的意味の理解】は、高齢者に対して関心を持ちながら接したり、介助を行ったりという実践としての関わりの大切さや、関わることで自分が援助的な意味を持つことに気づくという学びの内容で、『関わりの大切さを実感する』、『あきらめずに誠実に関わる姿勢が大切と感じる』、『共に居ることの援助的意味を知る』の3つの下位カテゴリーが含まれた。【関わりの楽しさ、難しさの実感】は『さまざまな角度から援助を考えることは楽しいと感じる』、『対象理解は簡単なことではないと実感する』の2つの下位カテゴリーが、【自己の課題の明確化】には『自分を意識して振り返る』、『思いを言葉で表現していく』の2つの下位カテゴリーが含まれた。

6. 【施設ケアの特徴の理解】

【施設ケアの特徴の理解】は、実習施設である介護老人保健施設や介護保険サービスにより提供されるケアの特徴に関する学びの内容である。【ケア提供の場の特徴】と【施設での連携の特徴】の2つのサブカテゴリーから構成され、【ケア提供の場の特徴】では、『施設は高齢者にとって生活の場であり、家であり社会であると知る』、『高齢者の個性が集団からの逸脱を招くことに気づく』、『高齢者どうしは互いに生活に影響しあうことを知る』、『ケアの質がそこでの生活の質に影響すると感じる』、『家族へのケアの重要性に気づく』の5つの下位カテゴリーが含まれた。【施設での連携

の特徴】には『他職種との連携が密に図られる場であることを知る』、『他職種それぞれの立場、見方を尊重することで連携が図られていることを知る』、『ケア提供者間の体験の共有が連携に役立つと気づく』という3つの下位カテゴリーが含まれた。

7. 【高齢者ケア施設における看護の役割の理解】

【高齢者ケア施設における看護の役割の理解】は、高齢者ケア施設において看護が求められる機能や役割に関する学びである。【高齢者の健康管理】、【健康管理に関する他職種との連携】の2つのサブカテゴリーで構成された。【高齢者の健康管理】には『疾患を持った高齢者の健康管理をする』、『高齢者の生活を重視した疾患管理をする』、『高齢者の体調変化の原因を探る』、『日々の言動から認知症高齢者の健康状態を把握する』、『言動の変化から認知症高齢者の健康状態の変化をとらえる』の5つの下位カテゴリーが含まれた。【健康管理に関する他職種との連携】には『それぞれの職種の見方を尊重する』、『他職種からの情報を統合する』、『根拠を持って看護判断を下す』、『判断の結果を他職種に伝える』といった下位カテゴリーが含まれた。

VIII. 考 察

1. 老年看護実習での学生の学びについて

今回、老年看護実習における学生の学びは、【高齢者の特徴の理解】、【高齢者看護の実践】、【高齢者観の発

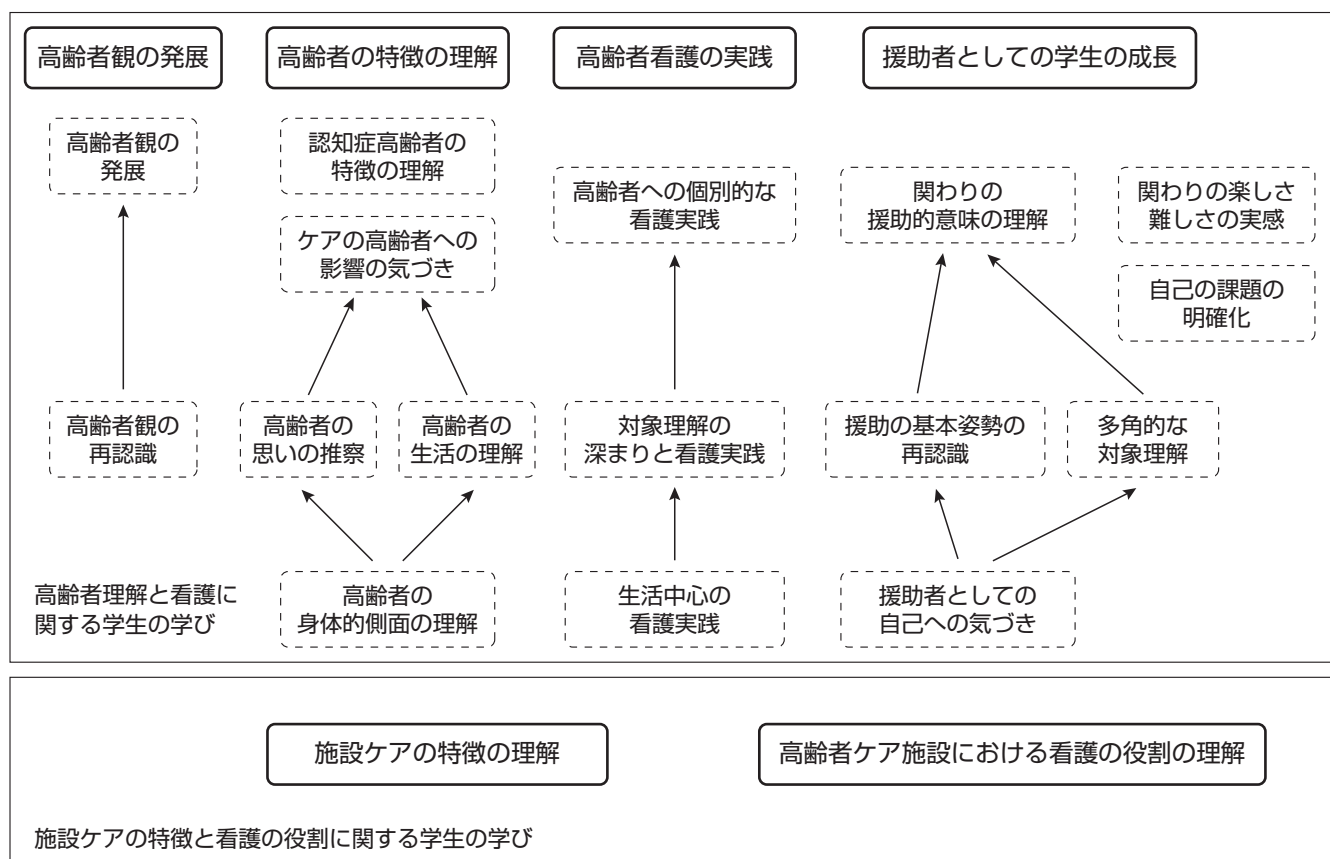


図1. 学生の学びの発展

〔 〕 サブカテゴリー □ カテゴリー

展】、【援助者としての学生の成長】、【施設ケアの特徴の理解】、【高年齢者ケア施設における看護の役割の理解】のカテゴリーで構成された。看護は、対象理解の深まりと共に看護実践の内容も具体的かつ個別的に発展する。したがって学生の学びである【高年齢者の特徴の理解】の内容の発展と共に【高年齢者看護の実践】の内容も発展すると考えた。更に【高年齢者の特徴の理解】がすすむにつれて【高年齢者観の発展】が深まり、【高年齢者看護の実践】の発展をとおして【援助者としての学生の成長】がすすむと考えた。この考えの下に、今回明らかとなったカテゴリー、サブカテゴリー、下位カテゴリーで構成された学生の学びを、内容の発展性という観点からみたところ、(図1)のような学びの関連図が描けた。以下、【高年齢者の特徴の理解】、【高年齢者看護の実践】、【高年齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】について学習の発展という視点から考察する。

1) 【高年齢者の特徴の理解】と【高年齢者観の発展】

【高年齢者の特徴の理解】としてまず、加齢に伴う身体

機能の変化や疾患・障害による機能低下といった高齢者の身体的な側面に着目し、『疾患が高齢者の身体面・精神面に影響することを知る』ことや『身体・精神面の変化の日常生活への影響を把握』し、あわせて体調変化が高齢者に及ぼす影響の大きさから高齢者の『予備力のなさを実感する』という「高齢者の身体的側面の理解」がみられると考えた。更に身体的側面のみでなく高齢者の生活歴や人生背景を知り『全体像と生活から理解する』『高齢者の生活の理解』がみられ、高齢者の『言動から思いを推察する』ことで「高齢者の思いの推察」という学びから高齢者の生活のあり方や価値観の多様性といった特徴の理解が深まると考えられる。【高齢者の能力の発見】は、高齢者も自立の意欲を持っており、多くの能力を保持していることに気づくという学びである。また、【ケアの高齢者への影響の気づき】では、提供するケアの質によって高齢者の能力は大きく影響を受けるということを実感している。高齢者の能力の限りなさを感じると同時にその発揮はケアの質に大きく影響を受けるという、高齢者の特殊性の理解へと発展していると考えられる。加えて、

「認知症高齢者の特徴の理解」では認知症高齢者個別の身体的な状態や思いの把握、能力の発見、ケアが与える認知症高齢者への影響の大きさを知るといった対象理解の進展が考えられる。

看護学生が重度・中等度認知症高齢者を理解する過程について調査した渡辺、小林（2002）の研究では、学生の対象理解は実習初期には「機能をアセスメントする」、「機能に即した生活の援助をする」といった内容が中心だったとしている。しかし実習後期になるにつれて、「言動を解釈し気持ちを推測する」、「気持ちを尊重した援助を行う」という、より対象者個別の気持ちや心理状態に着目したものとなり、最終的に「生活史と結びつけて言動を読む」といった内容へと発展する過程を示していたと報告している。これは、本研究における「高齢者の身体的側面の理解」から「高齢者の生活の理解」、「高齢者の思いの推察」といった結果と内容が一致しており、学生の【高齢者の特徴の理解】の発展過程も実習での高齢者とののかかわりの深まりと共に現れると考えられる。

上述の【高齢者の特徴の理解】の発展とあいまって、学生の【高齢者観の発展】がみられると考えられる。このカテゴリーは「高齢者観の再認識」と「高齢者観の発展」のサブカテゴリーで構成されるが、「高齢者観の再認識」では高齢者は『人生の先輩である』といった尊敬する存在としての認識と同時に『疾患や障害への不安を抱えている』という側面を認識している。一方で「高齢者観の発展」には『意欲を持った人々である』、『日常生活の意味に重みのある存在である』といった高齢者に潜在する能力への気づきが加わった内容がみられ、高齢者観が発展していると考えられる。このことは実習のなかで「高齢者の身体的側面の理解」と共に「高齢者の生活の理解」をし、生活歴に裏打ちされたさまざまな「高齢者の思いの推察」や「高齢者の能力の発見」という【高齢者の特徴の理解】の深まりが「高齢者観の発展」につながるのではないかと考える。

小泉ら（2000）は高齢者へのライフヒストリー・インタビューを取り入れた学習効果の報告の中で、学生が高齢者の生活史を聴取して学んだこととして、高齢者の時代背景や人生経験の長さ、体験の多様さをあげていたと述べ、そのような高齢者の経験を知ること

で「自然と高齢者に対し尊敬の気持ちを抱いた」学生が多かったことを報告している。また、須田ら（2006）も実習の中で学生が高齢者と直接触れ合うことで、高齢者に対するイメージを肯定的なものに変化させていたと報告し、奥野（2002）も同様に看護者の高齢者観は日頃高齢者ケアに携わりながら豊かになっていくと述べている。このことから、実習での関わりの経過と共に【高齢者の特徴の理解】が深まり【高齢者観の発展】がみられていくと考えられる。

2) 【援助者としての学生の成長】と【高齢者看護の実践】【高齢者の特徴の理解】の発展

【援助者としての学生の成長】は「援助者としての自己への気づき」があり、次いで「多角的な対象理解」、「援助の基本姿勢の再確認」へとすすみ、最終的に「関わりの援助的意味の理解」に至っていた。その過程の中で「関わりの楽しさ、難しさの実感」と「自己の課題の明確化」がみられていた。

『自分を振り返ることは大切と気づく』といった自己への気づきにより、学生は援助者としての自己をより客観視することができ、「多角的な対象理解」や「援助の基本姿勢の再確認」という成長が進むと考えられる。このような【援助者としての学生の成長】にともなって、【高齢者看護の実践】もまた、「生活中心の看護実践」から、『その人の思いを知る』ことによって『その人らしい生活ができるよう支援する』という、より個別性の高い「対象理解の深まりと看護実践」に発展していくと考えられる。

その人らしい生活支援のためには、その人らしさとしての「高齢者の生活の理解」、「高齢者の思いの推察」、「高齢者の能力の発見」が重要である。【高齢者の特徴の理解】の深まりすなわち、「その人らしさ」への理解の深まりが「高齢者への個別的な看護実践」へとつながると考えられる。

野口（1997）は「老年看護の対象である高齢者が、加齢に伴う身体機能の変化や役割の変化、環境の変化を自覚し、それを受け入れつつ、セルフケアを行ったり支援を受けたりしながら主体的に生活をしていくためには、自分自身であり続け、一貫した自己を創造できること、つまり変わらないものとしての自分らしさ

を追求できるようなケアが必要である。」と述べている。学生が深めた高齢者の「その人らしさ」の理解による[高齢者への個別的な看護実践]とはまさに野口の指摘しているケアである。また、認知症により自分が自分でなくなれることを自覚し、辛い思いを抱えている認知症高齢者にとって、日常生活上の些細なことであっても自分らしくあることの意味は大きい。[高齢者への個別的な看護実践]で学生はより個別性の高い援助として『高齢者がイメージしやすい声かけを工夫する』、『高齢者の楽しみや課題を見つけ提供する』という実践を行っていた。このようなケアによって認知症高齢者は日常生活の中で他者と関わることの喜びや楽しみ、役割を担うことでの生活の豊かさを感じられるのではないだろうか。認知症により混乱し消え入りがちな自己を支え希望を維持していくためには、暮らしの中の豊かさが必要であると永田(1997)は述べている。[認知症高齢者の特徴の理解]という【高齢者の特徴の理解】の深まりと共に発展する【高齢者看護の実践】は認知症高齢者にとってなくてはならないケアであるといえる。

【高齢者看護の実践】での[高齢者への個別的な看護実践]に学生の学びが発展するにしたがい、【援助者としての学生の成長】は[関わりの援助的意味の理解]にまで至ると考えられる。そしてこういった学びの深まりがあつてこそ、[関わりの楽しさ、難しさの実感]ができるのであり、[自己の課題の明確化]もできるといえよう。

3) 学生の学びからみた実習内容の評価

今回明らかとなった老年看護実習の学びにおける【高齢者の特徴の理解】、【高齢者看護の実践】、【高齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】は、高齢者一人ひとりの個性を重視した援助課題の明確化と、より個別性の高い看護実践へのプロセスを踏んでおり、【施設ケアの特徴の理解】、【高齢者ケア施設における看護の役割の理解】といった学びをあわせると、高齢者のQOLを考慮した看護過程の理解、高齢者との関わり方の理解、高齢者の生活の場である施設と利用者の特徴の理解、高齢者介護施設での看護職の役割の理解、といった老年看護実習における学習目標を十分に

達成するものと考えられる。

IX. 結 論

老年看護領域での実習内容および方法の検討のための資料を得る目的で、介護老人保健施設において、看護過程を展開する老年看護実習での学生の学びを明らかにした。その結果以下の内容が示された。

1. 老年看護実習での学生の学びは【高齢者の特徴の理解】、【高齢者看護の実践】、【高齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】、【施設ケアの特徴の理解】、【高齢者ケア施設における看護の役割の理解】の6つのカテゴリーで構成されていた。
2. 学生は看護の対象である高齢者との看護実践をとおして【高齢者の特徴の理解】を深めながら、自身の【高齢者観の発展】、【援助者としての学生の成長】をすすめる、より個別性の高い【高齢者看護の実践】という学びを得ていた。

これら学生の学びの進展とその内容から、生活の場を重視した看護実習の重要性が確認された。

X. 研究の限界と課題

今回の実習における学生の学びに関する研究は、学生個々が実習終了時に表現した学びの内容を分析したものであり、今回述べたような学習の発展が個々の学生でどこまで生じていたか、その学習の深まりを明らかにしたものではない。しかし、今回の結果から学生の実習での学びの内容に発展性があり、関連図を描けたことで、学びの深まりについてプロセスを示すことができたといえる。今後は個々の学生が、実際にこのような学びの発展プロセスを経るのかという検証、また学生の学びの深まりに教員のどのような関わりが影響していたかについても明らかにする必要がある。

謝 辞

調査にあたり、協力に快く応じてくれた学生諸氏、ならびに学生の豊かな学びの場を提供してくださった実習協力施設の皆様に深く感謝申し上げます。

文 献

- 小泉美佐子, 伊藤まゆみ, 宮本美佐 (2000) : 老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果, 老年看護学, 5(1), 140-146.
- 厚生労働省 (2006) : 高齢者介護研究会報告書「2015年の高齢者介護」, 8-18,
<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/kentou.html>
- 永田久美子 (1997) : 痴呆のある高齢の人々の自己決定を支える看護, 老年看護学, 2(1), 17-24.
- 野口美和子 (1997) : 老人看護学再考－自我発達の観点から－, Quality Nursing, 3(10), 4-9.
- 奥野茂代 (2002) : 老年看護における高齢者観の再考, 老年看護学, 7(1), 5-12.
- 須田厚子, 榎本朋子 (2006) : 看護学生の講義・演習・実習による高齢者イメージの変化, 川崎医療短期大学紀要, 26, 29-36.
- 渡辺みどり, 小林陽子 (2002) : 看護学生が中等度・重度痴呆性老人を理解する過程, 山梨医科大学紀要, 19, 121-126.

【Abstract】

Students' Learning through Nursing Practice in Health Care Facilities for the Elderly

Mayumi CHIBA¹⁾, Mika HARADA¹⁾, Emi HOSODA¹⁾,
Yuko KUSUMOTO¹⁾, Midori WATANABE¹⁾

¹⁾ Nagano College of Nursing

The purpose of this study is to clarify what students learn through nursing practice in health care facilities for the elderly and examine the significance and possibilities of the practicum in such facilities for gerontological nursing education. We qualitatively analyzed the practicum reports of 41 students who agreed to participate in this study. They had a three week clinical practicum in gerontological nursing between October 2006 and July 2007.

As a result, a total of 193 codes of various students' learning experiences in their nursing practice yielded six categories: 1) "understanding of characteristics of the elderly," 2) "implementation of gerontological nursing care," 3) "broadened views toward the elderly," 4) "students' growth as a nurse," 5) "understanding of characteristics of institutional care," and 6) "understanding the roles of nursing in health care facilities." The students deepened their "understanding of characteristics of the elderly" through their nursing practice, and acquired "broadened views toward the elderly" and "students' growth as a nurse." In this process, the students achieved an "implementation of gerontological nursing care" highly individualized for the elderly persons. These results prove the importance of the gerontological nursing practicum in health care facilities where students interact with the elderly in their everyday life settings.

Key words: gerontological nursing practicum, health care facility for the elderly, student learning

千葉真弓（ちば まゆみ）
〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694
長野県看護大学看護学部
TEL&FAX: 0265-81-5175
Mayumi CHIBA
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: mchiba@nagano-nurs.ac.jp